

## 6 大臣と役人

公務員制度や行政機構の改革ないしはその簡素化とか能率化とかをうたうことは、歴代内閣の施政方針のおきまり文句になってきたが、それに手を染めて見るべき実効を収め得た内閣は未だかつてなかったといつても過言ではない。一体これはどうしたことであろうか。一考に値する問題であるにちがいない。

歴代の大臣というものは、役所の主人公であつて事實は主人公ではないといふところに、その秘密が隠されているように思われる。ずっとその役所に所属し、そこに生涯の浮沈と運命を託しているのは、その役所にいる役人衆であつて大臣ではない。主人公たる大臣は栄光をになつて登場してくるが、やがてはその役所とは縁なき衆生になつてしまふ存在である。大臣は主人公たる虚名をもつてはいるが、事實はその役所の仮客にすぎない。

仮客である以上は、大臣が自分の運命をその役所に託するなんていふことは途方もない量見で、大臣になるほどの世渡りの上手な人であれば、そんな馬鹿なことを考える人は一人もない。従つて彼はその在職期間中、なるべくにくまれずにやりたい。さらには物判りのよい大臣として、役

人衆に親しまれたくなるに決まっている。もつと進んでその役所の権限や予算、さらにはその定員を殖やすことよって、「政治力のある大臣」として高い評価をうけ、畏敬をも受けたいという野心をもつとしても、少しも不思議はないはずである。

そういう立場とメンタリテイをもった大臣に、大きい改革を求めるのは、求める方が無理である。大臣は、いつの間にか、その役所の利益の代弁者になってくる。はじめのうちは、政治家らしい改革意図を失わないつもりで気負っていても、やがて彼は身心ともその役所のミイラになってしまう。自己の運命をかけた役人衆と、かりそめの客人たる大臣との相撲は、勝負がはじめからついているといつてもよい。

そんな大臣では天下の大事を託するに足らない、などといつて悲憤慷慨してみてもはじまらない。大臣もまた平凡な人間であるからだ。役人衆は公僕なのだから、国民の利益のために大臣の命令のままに随順すべきであつて、時の政府の大方針を曲げたり阻んだりするのはいけない、といきまいてみるのも愚かである。自分の名譽と生涯の運命を賭けた役所の存亡に、役人衆が無関心であるはずがないからである。役人衆もまた平凡な人間であるからだ。だから、私の大臣に対する提言はこうである。もともと公務員制度や行政機構にまつわる大きい改革意図などはお持ちにならない方が無難であるが、その改革意図をふり回すなどということはなおさら危険であると

いうことである。ご自身に危険であるばかりではなく、大きくいってお国のために無益であれば  
 まだしも、有害である場合が少なくないのだということである。

それではいったいどうすればよいのだと反問される大臣がありとすれば、私は率直にお答えし  
 たい。昔、蒙古の名相は「百利を興すは一害を除くに如かず」という不朽の嘆声を洩らされた。  
 除くべき一害は大臣に成り上ったような貴方であれば、大臣室の机の上に無数にころがっている  
 はずだ。身辺に無数にころがっている毒毒や非能率を見ぬくほどの眼識が、その人に備わってい  
 ないというのであれば、そもそもその人が大臣になったのが間違いであったことになりはしない  
 だろうか。国民は百利を興すことに汲々たる大臣よりは、一害を除くことに心胆をくだいてくれ  
 る大臣を求めているのである。国民のために百利を興すべく発心して努力してみても、その結果  
 はほとんど例外なく役所の権限と予算の増加を来すことはあつても、国民の生活に資するところ  
 は乏しく、ひよっとすると国民の生活に余計な制約と負担を来すことになりかねないからだ。